

OPINION!

保健師さんへ

この街の人たちと
めぐりあえて、本当に幸せ。
精いっぱいのことをして、
後悔しない生き方をしたい。

簡易宿泊所（通称・ドヤ）が立ち並ぶ横浜・寿町で、30年以上診療を続けている佐伯輝子さん。“女赤ひげ”とも呼ばれ、荒っぽい住民たちから親しまれています。佐伯さんの飾らない言葉や笑顔は、人間として、医療者として、本当に大切なものを教えてくれます。

寿町勤労者福祉協会診療所
所長

佐伯輝子さん

聞き手 編集部

診療を始めたのは、
子どもたちの言葉から

「寿町は、大阪の釜ヶ崎、東京の山谷と並んで三大寄せ場の一つとして知られていますが、女性が足を踏み入れるには危ない街だとも聞きます。なぜ寿町で診療を始めることになったのでしょうか。」

佐伯 ここへ来る前は、主人と一緒に横浜で開業していました。金沢区の南部市場の診療所と掛け持ちしていたので、多忙な日々を送っていました。そんなとき、横浜市から電話があり、「横浜に寿町という労働者の町があるのだが、医師がいらないため、ぜひ来てくれないか」と言うのです。主人に話したら「とんでもない！」と猛反対でした。

横浜市中区の寿町には、第二次世界大戦後のアメリカ軍接収終了後、職業

上忙しくなると、主婦の仕事に支障が出るというのも問題でした。でも意外なことに、決心したのは二人の子どもたちの言葉でした。「ママ、断っちゃ悪いよ、待っている人を助けなきゃ」ってね。

ちょうど息子と娘は医学部、歯学部合格したばかりだったので、医師としての希望に燃えてい

だまりでした。日常的に放火、乱闘騒ぎ、薬物の売買、売春などが行われ、街は無法状態でした。そんなところでしたから、主人が反対するのは当然です。それからこれ以

安定所の移転や簡易宿泊所が建設され、大勢の日雇い労働者が移り住みました。大半は住民登録をしておらず、刑務所から出てきた人、駆け落ち、家族との絶縁などで流れついた人の吹き



これから始まるみたい人間、そういう人間と付き合えるから、自分まで裸になるような気持ちになれるのよ。

PROFILE

●さいき・てるこ●

東京・神田生まれ。東邦大学医学部卒業後、1959年、夫の誠也氏とともに佐伯医院を開業。75年、横浜市金沢区にある南部市場内の佐伯診療所、79年、寿町勤労者福祉協会診療所所長に就任、現在に至る。85年、寿町の診療活動に対して、吉岡弥生賞を受賞。

るんです。私たちはもう古だぬきになっちゃって、「ご飯はどうする」「誰が用意するんだ」といった話ばかり（笑）。後から反省しました。主人も「じゃ、君やってみる？」と言い出して。――お子さんたちの意見が後押しとなったのですね。

佐伯 そうなんです。診療所がある寿町勤労者福祉会館は1974年に建設されました。1階から3階までは理容所、浴場、食堂、図書室などがあり、4階から9階までは生活保護者の市営住宅になっています。診療所は3階に狭いスペースが確保されましたが（現在は1階に立派なスペース）、5年以上、医師のなり手がなかったそうです。困り果てた横浜市と横浜市医師会は、開業20年以上の診療所勤めの経験、夫婦ともに医師であり、寿町から通勤圏という私に白羽の矢が立ったというわ

けです。それから超多忙な生活が始まりました。家事は主人と分担するようにし、南部市場の診療所は早めに切り上げ、午後から寿町で診療することにしました。お昼ご飯も食べる時間がないので、自分で運転する車の移動中、赤信号の間にお弁当をひと口、ふた口、口に運ぶような具合です。契約期間も決めずにきてしまい、あつという間に30年たってしまいました。

死ぬときは一人だと思ったら、生き方が変わった

――随分怖い思いもされたとか。

佐伯 当時の寿町は昼間でも物騒だったので、「先生は一步も外へ出ないください」「往診もだめ！」と言われていました。けんかでお腹を刺されたという事故はしょっちゅうありました

アルコール中毒だったようです。こんなこともありました。私は自動車で出勤していま

いきなり私の首を腕でぐつとまわして絞めてきました。大きな凶体だったの

すが、診療所の駐車場へ車を入れてみると、いつも来る患者さんが「よう、先生、来たのかよ」と声をかけてきました。「来たわよ」と言いながら診療所へ入ろうとしたら、「ちよつと話があるから待てよ」と呼び止めます。「患者さんが待ってるし、中で話を聞くから」と言って行くこうとしたら、「なんで逃げるんだよ!」と言って、



が、そんなときは現場に看護師さんと男性職員がついてきました。診療中何が起こるかかわからないので、防犯ブザーもほとんどすべての部屋や机に取り付けてあります。

79年の夏のことですが、午後だけで90人以上の患者さんを診なければならず、待っている患者さんで廊下はいっぱいになっていました。廊下からは「テーマーっ」だの、「オメエ踏んだ」の「触った」だのと、けんかしている声が聞こえてきます。順番で入ってきた男の患者さんのレントゲンを撮り、「現像するから待っててね」と言って次の患者さんを診ていたら、後ろから「うーっ」といううなり声がする。何かと思つて振り向いたら、その男の人がこちらに襲いかかってきた。何人かの職員に取り押さえられたけど、手にはカミソリの刃を持っていました。長い時間待たされたことに怒つてのことだったようです。でも後から聞くと、どうも彼は

で、警察官あがりのガードマンが離そうとしましたが、まったく立ち行かない。おそらく、その人は最初半分ふざけたつもりだったと思うのですが、触った相手が「女性」であったことに気づいて、どうもけいれんを起こしたようなのです。3階から事務の人が駆けつけてくれて、ようやく手を離してくれました。そのときはさすがに怖くなり、へなへなと腰が抜けてしまいました。

そこで思つたのです。「なんだ、人間ってどこで死ぬかわからない」。

たとえ夫婦がどんなに仲良しでも、死ぬときは一人なのだ、と。それを実感してから、生き方が変わりました。だから夫にもけんかをふっかけなくなりました。いつ死んでもいいような、後悔しない生き方をしようと思つています。だから毎日がとつても穏やかです。

寿町のいま—
生活保護受給者の増加、
若い人の流入

—30年たって、社会情勢も大きく変わりました。寿町も大分変化した部分があるのではないのでしょうか。

佐伯 そうですね、かなり変わったと思います。まず街がきれいになりました。以前は外には絶対出るなどいわれるほど、道路で殺人事件もちよくちよく起こっていました。今は昔ほど暴力事件も起こらなくなりました。現在、簡易宿泊所は100軒ぐらいいあり、6000人ほどの住民がいます。老人だから悪さもしないので、女性のヘルパーさんが一人で宿泊所に入って行き、病気の人を診療所に連れてきます。昔では考えられません。

昔、血気盛りだった男たちは、今は

もう60、70歳です。当時けんかをするような男でも、おとなしくなっています。寿町は8割以上が生活保護受給者なので、暴力ぎたを起すすと保護が打ち切りになってしまおうということもあるでしょう。昔は生活保護の審査も厳しく米びつまで調べたものですが、最近は人間の生きていく上で最低限必要な費用を受給できるようになっています。テレビ、電話、クーラーもOK、年金より割がいいのです。働かないで何とか暮らし、年をとったら国にお世話になる。こういう生き方もあるのだということ、ここに来て初めて知りました。

—どのような病気が多いのでしょうか。

佐伯 2001年ごろに、寿町で結核がまん延したことがありました。横浜市衛生局、国立療養所南横浜病院、財

団法人の寿町診療所の3つがタイアップしてDOTS治療を行いました。このときは保健師さんが大活躍しました。多くの患者さんが合併症を患っているため、1回の薬剤量も多い。だから常に患者さんの健康状態を考え、保健師さんが患者さんのところへ行つて診療所に連れてきたり、簡易宿泊所を探したりの段取り、フォローをすべてやってくれました。5年ほどで効果が現れて、まだ完全ではありませんが結核が下火になりました。

精神疾患も多いですね。アルコール依存症、薬物依存症の人が多いので、普通に会話をしているかと思うと、天井と話している人もいます。幻覚が現れているのです。そういうときは話し終わるまで待っています。とくに最近はずつと考えごとをして眠れないう人もよくいます。

ひところは、会館の広場でゴミを燃

やしてたき火をして暖をとっている人が大勢いました。ゴミの中にスプレー缶が交ざっていて、それが爆発してやけどで運ばれてくるがよくありました。今はたき火は禁止になりましたので、そういうことはなくなりました。たき火のすすで汚れた天井は、絵描き

さんが白い花を描いてくれて、きれいになっています。

—若い人はいないのでしょうか。

佐伯 いますよ。特に近年の不況の影響で会社が倒産したり、リストラされ

た若い人たちが寿町に流れてきています。横浜市ホームレス自立支援施設は「まかせ」というところでは、横浜市の各区の福祉の方が毎日巡回して、横浜市内の公園、河川などでホームレス状態になっている人を毎日10人くらい連れてきます。そして伝染病の有無などを調べるため、翌朝診療所で健診するのです。するとその中によく20、30代の若い人がいます。親は知っているのか、たぶん知らないのでしょうか。どこかで働いているかと思っているのかも知れません。いろんな事情があるので、いろいろな思いがします。

—なぜ寿町に来てしまうのでしょうか。

佐伯 寿町の住民には心根が優しい、純粋な人がたくさんいます。いい人だけ、言いたいことが言えないような気の弱い人です。たとえば病院を紹介



数年前、日雇い労働者たちがゴミを燃やして焚き火をしていた広場。すすで真っ黒になった天井は、芸術家によって白い花が描かれている(写真上)。寿町の街並み(休日の風景)(写真下：編集部撮影)。

しても、次の外来の予定を決めずに帰ってきてしまう。『今度いつ来ればいいのか』と心の中で思っても、聞けない気の弱さがあるのです。そこで、「ま、いっか」と思ってしまう。人間、生きていくには、*「ここぞ」*というときは言わなきゃいけないでしょ。しなければならぬ肝心な部分をなぞざりにしてしまふ弱さに、原因があると思っています。それは、仕事や結婚生活すべてに通じることです。最後の一步を放り投げてしまふとすべてに決め手がなくなり、尻切れとんぼになる。優しくていい子だけじゃいけません。それは母親が子どもを育てるときにしっかりとつけなきゃだめなことです。「いいよ、ママがやってあげるね」はだめ。自分でやらせていかないとね。よく若い人が犯罪を起こすと、「いい子なのに」っていうでしょう。それが大きくなって風来坊になってしまうのです。良いことだけじゃなく、嫌なこ

たのでしよう。普通の人なら逃げてしまふのでは？

佐伯 寿町の人たちは一見怖いけど、憎めない人たちです。普通では味わえないお付き合いをしています。言いにくいこともはっきり言いますしね。私は患者さんに対してうわべだけで説明することなく、誠心誠意、裏表なく、何日たっても次に同じ説明ができるよう心がけています。「先生の話聞くと、安心して帰れる」って患者さんも言うてくれます。

心が温まる出来事も、たくさんあります。

私が出てくるテレビ番組を見た患者さんから、「先生、家族いるんだってな、よくここに来るなあ、旦那にあげてくれ、お礼だ」と言って、缶詰を一個いただいたことがあります。シールも貼ってないし、何の缶詰かわからない。家に持ち帰って、爆発でもするんじゃない

ともやらないと。

診療所の入り口には、全身が写る大きな鏡を取り付けています。患者さんたちが住んでいる二畳、三畳の簡易宿泊所では、小さな鏡が一枚あるかないかでしょう。何年も自分の姿を鏡に映してみたことがない人もいると思えます。鏡に自分の姿を映すことによって、



佐伯さんの診療機と聴診器

ないかと恐る恐る開けたら、カニ缶でした。旦那と一緒に食べちゃいました(笑)。缶詰は、その患者さんの精いっぱいのお気持ちだったのでしよう。

それから先日の話ですが、ミカンをおいただいたので、診療所の隅に置いておいたら、一人の患者さんが血相変えて入ってきて、「先生！ ミカン、くれないかな」って言うんです。「だめよ、全部先生だよ」「お願い、お願い」「じゃあ、一個だけ」って(笑)、仕方がないからあげましたよ。

実際診療は大変です。何カ月もお風呂に入っていない人はザラにいますし、ズボンをとるとパンツをはいてないでウンチペタペタだったり、診療中、おしっこをもらしたりもする。パンツを買うよりカップ酒を買いたい人たちのです。

でも汚くても臭くても、何でも平気。「これから始まる」みたいな人間と付き合えるから、自分まで裸になるよう

汚くだらしない自分、それから、その時の心の動きから現れる自分の表情を見てもらおうと考えたのです。「どうせすぐに割られてしまふ」と言われていましたが、いまだに割られていません。私は、この診療所自体が鏡でありたいと思っています。言葉遣いにしてもらうんです。たとえば酔っ払った患者さんにドアを破られたとき、スタッフが、「けががなくてよかったです。もうあんなことしないでね」と言います。どうですか、この一言ほど、酔いが醒めたときにきつい優しさはないでしょう。私たちの言葉遣いや対応で、自らを振り返る、身を正すきっかけとなればと思っています。

純粹で子どものような。
始まったばかりの
住民たち

—どうしてこのお仕事を続けて来られ

な気持ちです。きれいな洋服着て、キラキラしてたら付き合い合えないな、と思います。「人間はこういうもんだ」ってことが味わえています。

この街でいろんな人とめぐりあえて、自分の人生も変わったし、今は働けるだけ働いて、生き抜こうと思っています。決して嫌々じゃなくて、自分はこのに来ることで幸せを覚えた。

今、本当に幸せです。

編集部から

取材が終わると診療所は、待っている患者さんでいっぱいになっていた。佐伯さんのお話を聞いていると、不思議と温かい気持ちになる。お話しして、一緒に笑うだけで、病気も吹っ飛びそうだ。家族が何よりも大事だとする佐伯さん。寿町で働くことを勧めた息子さんは今、佐伯医院を継いでいるという。息子さんもまた、暗闇の世界を灯す光となるのだろう。